

日本の「原風景」を読む

原剛・著



本書は、「環境日本学」のあり方を探求して著してきた書籍の第3叢書という位置付けだ。新感染症や地球温暖化は、経済成長のために世界中で森林伐採や乱開発をし、生物多様性をかく乱してきた結果である。世界は今、変革の渦中にあり、自己と他者、人と自然の関係を変えらるる「ソーシャル・ディスタンス」が連呼され、継承されてきたつましい暮らしの流儀だけでなく、人と自然の共創である風景の存続やその価値観が揺らいでいる。社会システムの「ゆがみ」は、これまで覆い隠してきた人々の、精神の現状を一気にあらわにしている。

人や物の移動が制限され、どの国もほぼ鎖国状態の今春、著者は「自己を確かめよ」と、志賀重昂、小島鳥水、上原敬二に連なる第四の「風景論」を世に送り出した。海山、川、野鳥、里山、そして自然の神々、社会的共通資本を切り離してきた日本が忘れてしまった大切な「もの」は何か。読み進めると、風景に宿る「息づく心性」「美意識」に触れることがで

◇出版＝藤原書店
 ◇価格＝2700円
 ◇副題＝危機の時代に

広がる時空を超えた心の旅

◇はら・たけし 1938年生まれ。早稲田環境塾塾長、早稲田大学名誉教授、毎日新聞客員編集委員。自然、人間、文化を一体として「環境」と定義し、文化としての「環境日本学」を提唱する。

きる。これこそ本立の旅である。高度成長期から東日本大震災へと続く、一連の日本社会の環境行動を国の内外から取材をしてきた著者は、一貫して現場へ行って、環境問題の奥にある人々の心象を描き、再生に向かう「暗黙知」を社会に伝えることを止めない。そこで描かれたのは「ネット越し」には見ることのできない、私たちの「原風景」だ。民俗の語りや詩句のはめ込みで再現される原風景の記憶と時間、カメラマンが撮る人びとの「まなざし」の再生は、新しい日本紀行のモンタージュとなり、ここから時空を超えた「心の旅」が広がる。

世界が変わろうとする時、それまでの暮らしに蓄積されていた風景や美意識は往々にして犠牲になる。強引に先へ進むとすれば、小さき生き物や弱者らは悲鳴を上げる。本書は、むしろその悲鳴に耳を澄ます生き方を伝えている。自然界との「共存」を忘れた人間、顔の見えない世界に自己隔離する浮遊人へ、「地の人であれ」と伝えているのだ。